The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在日韓国人の敬語運用の一斑 ： 日本語と韓国語の待遇規範意識のはざまで
Author(s)	黄, 鎭杰
Citation	阪大日本語研究. 1996, 8, p. 45-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』8（1996）

在日韓国人の敬語運用の一斑

——日本語と韓国語の待遇規範意識のはざまで——

The Use of Honorifics by Koreans in Japan

黄　　鎭　杰
HWANG Jingeol

キーワード：コード切り替え，エスニックマーカー，待遇規範意識，敬語運用

0．はじめに

世界的にみると，単一言語社会は例外であり，多言語社会が一般的である。このような多言語社会において，その中でさまざまなレベルでのコード切り替えが存在する。一方，単一言語社会にもさまざまな変種が存在する。連帯意識，隔たり，親密さ，堅苦しさという要因を際立たせるために，それらの社会内部でのある言語変種から別の言語変種へ切り替える（真田1992）。

コード切り替えの社会言語学的研究としては，「言語使用域」，「相手との関係」，「相手への配慮」などの観点から解明しようとする試みがあり，筆者も在日韓国人のバイリンガルを対象に，日本語がベースとなっている談話の中での韓国語への切り替えを，話者間の動的・相互作用的・社会的観点などから考察したことがある。そこでは，コード切り替えが，単に話者の恣意的な言語活動の結果ではなく，それを支配するもろもろの言語内的・外的要因によっていることを明らかにした（黄1994）。

今日の在日韓国人社会は，世代交代の過程で韓国人としての固有のエスニックマーカーとなるものを衰退させ，一方でマジョリティ社会，日本への同化を余儀なくされているのが現状である。特に若い世代の日本社会へ

の同化は確実に進んでいる（鄭 1994，福岡 1993）[1]。しかも，文化変容と同化とが矛盾するのではなく，同時に行われている。また，1・2 世と 3 世以降の世代の間は断絶しているのでもなく，世代交代の過程で伝承意識というフィルターを通して，前の世代から後の世代へと連動していると考えられる。

本稿は，体系としての敬語を有する両言語の影響を受けている，ある在日韓国人の談話での敬語運用に関するケーススタディである。1 世や 2 世では，本国文化の変容と日本文化への同化と連関している者が多く，今回のインフォーマントもその中の一人であると考えられる。ここでは，両言語の待遇規範意識をどのように認識し，対在日韓国人コミュニケーション場面での敬語運用にいかに顕在化させているかを明らかにするのが主眼である。このようなアプローチは現在まで行われていない。以下，主としてインフォーマントの内省にもとづき，考察を加える形で論を進めてゆきたい。

1．調査の概要

調査は，大津市膳所在住の 1 世の女性 2 人（以下，一方をＢ（現在 84 才）とし，もう一方をＣ（現在 81 才）とする）と 2 世の女性 1 人（以下，Ａ（現在 59 才）とする）を対象に行った。

Ａについては以前から参与観察してきているが，今回の談話は，1995 年 1 月にＡとＢの自宅で収集したものである。Ｂの自宅での談話にはＡと筆者が参加し，Ａの自宅ではＣが新たに加わった。筆者は，Ａを通してＢとＣに調査に協力してもらうように頼み，まずＢの自宅で先に調査を行った後，引き続きＡの自宅で行った。調査は，ＢとＣに渡日の物語や在日の物語，思い出の深いトピックなどを掘りさげながら語ってもらい，ＢとＣの話にＡが積極的に加わるように頼んだ。しかし，実際の調査では，Ｂの自宅ではＢが，Ａの自宅ではＢとＣが会話の主導権をとる形となった。結果として，Ａは会話にはあまり積極的に加わっていない。

インフォーマント相互の関係は次のものである。Ａは自分の姑を介し，

その友達であるBと知り合いになった。AとCとは，同じ在日の人が集まっている地域に在住しており，3軒おきの近所なので普段からも付き合いがある。また，BとCは昔からの友達であり，以前は往来も頻繁であった。最近は互いに足の状態が悪くなり，たまにしか会っていない。今回，久しぶりの対面であったので，Aの自宅での会話はほとんど二人が中心となっている。

2．インフォーマントのプロフィール

2．1　Aのプロフィール

Aは在日1世の父母の間で生まれた在日2世である。父親はお寺の住職を勤めていた。父母とともに終戦前は日本籍であったが，終戦後，韓国籍を取得し，現在に至っている。生まれは敦賀市であり，幼い頃までそこで過ごした。終戦後，小学校3年の時，一家は韓国へ帰国する予定であったが，父親の事情により事態が急変し，現在の所に定住した。

ものごころがつく頃，在日韓国人であることに気づき，韓国の伝統服姿の母親と一緒に出かけるのをいやがったり，友達の前で母親が韓国語でしゃべるのを恥ずかしがったりした。小さい頃，食事の時，父親は他の家族とは別のお膳で食事をし，上の兄弟たちは，父親に対することばづかいに気をつけるようしつけられた。家庭内での父親の権威が重視される環境で育てられたと言えよう。当時，周りの他の在日家庭でも同様であったと回想している。

例えば，Aの夫の方も，自分の父親（Aの舅）の前では酒も飲めなかったし，タバコも吸えなかった。また，彼女も外から家に帰ると，姑の前で足を崩すこともなく，きちんと敬語で話すように心がけた。しかし，結婚後10年以上を過ぎて，やっと姑の前で足を崩すようになった。ただし，姑との序列や年齢による上下意識が親疎意識より強く働き，ことばを崩すことには抵抗があるという。これは，同じ在日韓国人と接する際も同様である。

結婚する以前の食生活は，日本食を食べたことがなく，ほとんど韓国食

であった。初めての日本食は，結婚して数年後，勤めていた職場の日本人の同僚と食べたお節料理である。現在も韓国食が中心であるが，日本食もある程度取り入れている。

彼女は日本の学校教育を受け，日本語が第一言語である。韓国語を習得し始めたのは結婚後であった。韓国系の教会に通い，牧師の説教を理解するためと，自分が韓国人という自覚意識が芽生えてきたためである。日本語の「読み」・「書き」・「聞き」・「話し」能力は，日本人と変わらない。一方，韓国語の方は，韓国語の説教は7割程度聞き取れるくらいであるが，「読み」・「書き」・「話し」能力はまだ不十分である。韓国留学経験のある一人息子との日常会話は日本語を用いている。

韓国語に対して，世界でいちばん美しい言語の一つであり，説教の場合，同じ内容を韓国語で聞くと「味があるように」感じるが，日本語で聞くと「淡白である」といった，プラスイメージをもっている。しかし，特に喧嘩ことばが非常にきつくて乱暴に聞こえるといった，マイナスのイメージももっている。彼女の親は韓国の慶尚道出身[2)]であり，また，同郷の人と多く接していることから，現在のソウルことばはあまり理解できないという。

対人ネットワークについては，本国の親戚との交流はほとんどなく，日本に在住する兄弟などの近い親戚や教会の人が中心である。また，現在在住する地域には，同じ在日の人が集まっているし，彼らとの付き合いがある。日本人との付き合いは職場の人に限られている。

生活上の必要から日本語の通名を使っており，表札には韓国語の本名と両方を表記している。

2.2　Bのプロフィール

Bは，14才の時，姉夫婦と一緒に渡日している在日1世である。紡績工場で働きながら，日本で知り合った在日1世と結婚した。夫に先立たれており，現在，末っ子の夫婦とその子供たちと同居する。韓国の出身地は，夫やAと同じく慶尚道でり，故郷には従兄弟が一人いるだけで，他の近い

親戚はほとんど亡くなった。現在，本国の親戚との交流はあまりない。

夫に対し，結婚当初から丁寧なことばづかいを一貫して用いてきた。年も上であり，夫の方から「ことばづかいに気をつけるよう」言われたこともある。家庭内での序列意識がかなり厳しかったことが伺われる。夫と出かける時，いつも3歩くらい後ろを歩き，それが礼儀正しいふるまいであると思っていた。

日本人が多く住む地域で住んでいたので，子供たちは韓国語ができない。両親に対しても丁寧なことばを使わないという。彼女の韓国語体系は，言語形成期を過ごした慶尚道の方言体系が維持されていて，Aと同じくソウルのことばは分かりづらいという。日本語の能力は，「聞き」・「話し」の方は不便を感じないが，生活上の必要から習得したという経緯から「読み」・「書き」の方は，特に漢字が不十分である。

食生活は，日本食には慣れているが，韓国食が中心となっているので，旅行に出かけた時，早く家へ帰って「キムチ」が食べたくなるという。

3．談話分析

以上，AとBのプロフィールを概略した。Aは，日本語が第一言語であるが，韓国の規範意識の強い1世の両親と義理の両親の影響を受けている。一方，Bは言語形成期を本国で過ごし，その後渡日しているので，韓国の待遇規範意識もある程度保持している。Bにとって日本語は第二言語である。

以下では，AとBが交わした談話を，特にAの発話に注目し，Aのもっている両言語の待遇規範意識が，Bとのコミュニケーション場面の敬語運用にどのように働いているかを見てみよう。

3.1　敬語運用の実態

以下，AとBの間の談話データによって，どういう状況下でどのような形式が用いられているかをみることにする。用例のA・B・Hは，それぞれ話者A・話者B・筆者のことを示す。傍線部は韓国語発話であり，（　）

の中に日本語の逐語訳を施した。

B　…いつもこうてくれるさかい。

A　わたしは教会で食べました(1)。…いや，わたしらはいつも大阪教会で

B　教会で食べた？

A　教会で食べます(2)。

上例は，韓国の雑煮が話題となり，BはいつもAに買ってもらっていることに感謝していることを述べている箇所である。その話題がでた時，Aは自分は教会で皆と一緒に食べたことを言っている（(1)）。この発話に対するBの再確認の質問に対し，Aは教会で食べたことをもう一度返答している（(2)）。ここでは，Aがいずれの発話でも丁寧語を用いている。

B　冷蔵庫，あのう，あれがあるわ。

A　何のいい物ですか(3)。

B　忘れるんや，これ，ことばを。

A　誰でも，私しもね，何か言おう思って，なかなかゆえない時であるしね(4)。

B　あんなの，ちゃんと

A　はい。年いくとだめです(5)。

B　ケーキ。

A　ああ。

B　どろどろハン（した）ケーキマシヌンゴ（美味しいもの）

H　これで充分です。

A　これでいいですって。…どうぞ。あのう，ゆっくり召し上がって下さいね(6)。

ここでは，「敬語形式なし」（用例(4)）の他に「敬語形式あり」もみられ，

両形式が混在している。「敬語形式あり」では丁寧語「～です（か）」が2例，尊敬語「召し上がる」が1例みられる。この形式は，「召し上がって下さい」と相手にコーヒーを勧めている場面で現れた。「～て下さい」の形式は，他にも用例(9)「座って下さい」と用例(12)「立って下さい」にもみられる。

これらの用例はAがBにある行為を要求することに言及しており，こういう場面でぞんざいな表現形式を用いることは，Aの意識の中では抵抗があるようである。

B　アー，ムル　アンノヌナ（お湯溢れるんじゃないの）？
A　よろしい(7)よろしい(8)。座って下さい(9)。

A　これ，どれ着ます(10)？これ着ます(11)？これも…。はい，寒くなるから。はい，立って下さい(12)。
B　…。
A　行きましょう(13)，行きましょう(14)。何もないけど。…。はい，行きましょう(15)。

上例の(10)・(11)は，Aが自分の家で食事をしたいという意向を示し，Bが出かける用意をしている場面での発話である。そこで，Bが何を着るかを確認している。また，(12)・(14)・(15)の用例は，Bに自分の家へ行こうと誘っている。

これまで，Aが「敬語形式あり」の表現を用いた用例は，相手（B）と関わりの高い発話内容である。その中の下位分類としては，相手の意向を尋ねるもの（意向確認），相手に誘いかけるもの（勧誘），相手にある行為を要求するもの（行為誘発）などにまとめられる。

こういう文脈では，相手を韓国の規範を以てより高く待遇すべきであるという，規範意識上の切り替えが起こると考えられる。AはBのことをどのように捉えているのだろうか。そこには，同じく在日韓国人であるとい

う連帯感と，また，自分より年長者であるという社会的上下意識と，さらに，姑の友達であるという人間関係のファクターなどが働いていると思われる。なお，A自身はこういう待遇行動を韓国的規範からの影響であると認識している。

一般に韓国では，敬語を使うかどうかの基準は，年齢が何よりも上下関係を決める優先要因となる。親疎意識が年齢を克服することはかなり難しい。したがって，AがBに対し日本語を使う時，親疎意識の方がより強く働くにも関わらず，上例の箇所では「敬語形式あり」を用いるのであろう。

こういう意識の問題は，以下の例でも確かめられる。

A　お父さん背高いな思ったけど，子供と比べたらだいぶ低くなったね(16)。
B　低くなった。子供みんな大きくなった。

A　健一君があんなに大きくなったと知らなかった(17)。
B　健一か。八十なんや。
A　トメちゃん，今もう短大卒業したの(18)？
B　今度は，短大卒業ハヌンデ（するけど），一年…

A　昔は，民団は民団で結婚して，チョンリョン（総連）は総連で結婚したね(19)。
B　うん。そうや。
A　しなかったね(20)。

用例(16)から(18)までは，Bの孫のことが話題になっている。一方の孫が父より背が高くなっていること，そして，もう一方の孫が，短大を卒業したかどうかということがトピックである。用例(19)，(20)の方は，昔の在日社会における結婚に対する考え方と実状がトピックである。

これらの用例についてのAの意識としては，「もし韓国語でBと話をす

る場合，このようなぞんざいな形式は使えない」と言う。つまり，日本語を使ってBに接しているからこそ，親しみを込めたこういう言い方ができるのだと言う。しかし，付き合いが始まった当初は，姑の友達であることもあり，敬語形式のある表現を好んで使っていた。今では，このようなぞんざいな表現形式に対して抵抗が少なくなったとはいうものの，ある程度は意識して敬語形式のある表現を使うという（フォローアップインタビューによる結果（ネウストプニー 1994））。

3．2　規範意識の移行性

今回の調査対象としたAは，規範意識の上で日本寄りでありながらも韓国的な様態をももっている。彼女については，プロフィールからも察せられるように，韓国の規範意識の影響を両親や義理の両親から強く受けており，また，在日社会を基盤においた人間関係ネットワークが中心なので，それが日本語の敬語運用にある程度顕在化しているという図式でまとめられよう。

一般に，在日2世以降の日本語に関する言語学的特徴は，日本人と変わらないというのが定説となっているだろう。しかし，実際のその使い方や社会言語学的能力においては，多かれ少なかれ韓国語の干渉を受けており，日本人の日本語とは相違が認められると考える。つまり，1世のような韓国語からの顕著な音韻的・形態的・統語的・意味的干渉は低下するにせよ，言語意識や言語運用などの干渉はある程度残ることが十分に考えられる。本稿はこういう観点からの分析である。

4．結びにかえて

社会の中での言語の果たす働きを追究するのは，社会言語学の主な研究課題の一つである。今日の日本では多文化・多言語などをめぐる多様性を受け入れる素地がまだできていない上に，韓国語のようなエスニックコミュニティの言語は家庭内に封じ込めようとする，いわゆる孤立化の言語同化政策が進められてきたと言っても過言ではない（マーハ，本名 1994）。

心理人類学者であるG. Devosは，「ある集団の民族的アイデンティティは，その集団成員個々の判断によって，自集団の文化の何らかの側面を象徴的に表すものによって成り立っており，それを共有する者に対して一体感をもち，それによって自集団を他集団から区別しようとする。」と述べ，さらに「エスニシティーとは，その言葉の最も狭い意味では，過去と連なっているという，感情であり，個人の自己規定の本質的部分として維持されている感情である。またエスニシティーは，集団の連鎖性に対する個人の欲求に密接に連なっている。それは集団の歴史的連鎖のなかでの個人の生存感覚を包含している。」と述べている（原尻1989）。

Devosの説明の中には，自己規定によって自集団の文化から民族的アイデンティティを選択していることが指摘されている。また民族的アイデンティティを感情として捉えており，その感情が自己規定の本質的部分になっているとする。これに対し，自集団を他集団から区別しようとするよりも，他集団に同化させようとするものもある。この場合は，本来の自集団のもっている規範意識は顕著に希薄となり，一見，自集団を他集団から特徴づけることが困難である。

おおまかに在日1世の世代には，過去やエスニックコミュニティとの連なり意識が強いが（宗教社会学の会1995），世代が新しくなるにつれて，そういう意識は希薄となろう（綾部1993，田中1991，中野1993，関1994）。このような状況下で，ある在日韓国人の日本語運用にみられる待遇規範意識の葛藤を，内省にもとづいて，敬語運用との関連において分析してみた。

この種の研究はまだ少なく，理論的裏付けや実証的データが乏しい。今後，家族単位でさまざまな条件の異なるものを対象にケーススタディを積み重ねていくべきであろう。そのことによって，在日韓国人の言語生活の全容の解明に一歩近づけるのである。

注

1）福岡安則（1993）には，日本に生まれ育った在日韓国・朝鮮人の若い世代の揺れ動くアイデンティティの葛藤を以下のタイプに分けている。日本人と共に生

きることをめざす「在日志向タイプ」，あくまで在外公民として生きる「祖国志向」タイプ，個人的努力によって自己実現をめざす「個人志向」タイプ，そして日本人になることをめざす「同化志向」タイプを推出している。pp. 76～107 参照。

2）「在日韓国・朝鮮人」の形成は，日本による朝鮮植民地支配によって決定的影響を受けている。「土地調査事業」や「産米増殖計画」などの政策の展開により，膨大な量の米穀を日本内地に奪い取り，朝鮮のとりわけ農村社会は生活基盤が解体された。そこで，仕事を求めて慶尚道・全羅道・済洲島など南部の人たちは日本に渡り，北部の人たちは旧満洲へ向かった。福岡安則（前掲書）pp. 21～25 参照。

参考文献

綾部恒雄（1993）『現代世界とエスニシティ』弘文堂

真田信治他（1992）『社会言語学』桜楓社

原尻英樹（1989）『在日朝鮮人の生活世界』弘文堂

J. V. ネウストプニー（1994）「日本研究の方法論－データ収集の段階－」『待兼山論叢』28 号，大阪大学文学部

宗教社会学の会編（1995）『宗教ネットワーク－民俗宗教，新宗教，華僑，在日コリアン－』行路社

ジョン・C・マーハ，本名信行編著（1994）『新しい日本観・世界観に向かって－日本における言語と文化の多様性－』国際書院

鄭　大均（1994）「在日韓国人はどこへゆく」『季刊アステイオン』No.3 2 TBS ブリタニカ

田中　宏（1991）『在日外国人－法の壁，心の溝－』岩波新書

中野秀一郎，今津孝次郎編（1993）『エスニシティの社会学－日本社会の民族的構成－』世界思想社

福岡安則（1993）『在日韓国・朝鮮人－若い世代のアイデンティティ－』中公新書

黄　鎭杰（1994）「在日韓国人の言語行動－コード切り替えに見られる言語体系と言語運用－」『日本学報』13 号，大阪大学文学部

閔寛植著／金敬得・金容権共訳（1994）『在日韓国人の現状と未来』白帝社

（ふぁん　じんごる　大阪大学文学部日本語学，社会言語学）